

Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.228

2022.9.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

## 加曾利B式土器

— 山内清男生誕120周年に向けて —

鈴木 正博

### ● 第47回 ● 山内清男と加曾利B式2「細別」

山内清男の加曾利B式研究は、昭和3年制定の層位別資料を記念碑とし、実態としては常陸・椎塚貝塚の充実した比較資料(第11図)を見据え、最新の地点別層位別調査資料との比較形態学により年代区分を導出する型式学が秀逸である。偶々昭和6年頃から順次常陸・下総を中心とした該期貝塚調査が活発化し新資料の蓄積も進み、層位別標本資料相互の新古変遷に加曾利B式「細別」導出の真髄を見出す。実際、加曾利B式3「細別」に至る過程では杉山寿栄男による前述の「大森式」再制定への対応や、更には人類学教室八幡一郎による加曾利B式概念拡大解釈普及等の課題が横たわるものの、順次地点別層位別に系統的な「細別」変遷が導出され、やがて3「細別」の要諦は昭和14年『日本先史土器図譜 第一部(関東地方)第三輯「加曾利B式」初版・ガリ版袋入』及び『日本先史土器図譜 第一部(関東地方)第四輯「加曾利B式(続)」初版・ガリ版袋入』に結実する(「初版・ガリ版袋入」は学史的書誌情報として念の為に紹介するが、文言の改訂や誤植等も承知の上であれば、『日本先史土器図譜』の慣例引用として昭和42年「再版・合冊版」を用いることに問題はない)。

まず、山内清男の加曾利B式「細別」に杉山寿栄男の「大森式」再制定が与えた影響から触れる。昭和4年の下総・中妻貝塚層位別資料報告を経、昭和6年には常陸・廻戸貝塚層位別資料紹介(原田淑人(1931)『考古圖編 第五号』、東京帝国大学文学部考古学教室)を参照枠とするならば、沼田頼輔の「大森式」突起は一部のみに含まれるものの、杉山寿栄男の「大森式菱形土器」等「大森式」の大半は欠落するという大きな差異は、武蔵・真福寺貝塚の地点別層位別発掘を報告する際に編年として活用される。即ち、「所謂薄手式がほとんど全部を占めるが、型式の種類多く、堀之内式の古いもの新しいもの、加曾利B式、大森式、安行式等がある。」(ゴチック体は引用者、以下同様)との僅少資料ながら「大森式」編年を認め、続いて「安行式」も再吟味され、「安行式1、2、3」の「細別」を公表する(山内

清男(1934)「真福寺貝塚の再吟味」『ドルメン』第3巻第12号)。この山内清男による「大森式」編年は「堀之内式」や「安行式」等と同様に関東地方の独立した「土器型式」であり、椎塚貝塚を構成する加曾利B式「古いもの新しいもの」とすべき「細別」とは異なる編年である。

ここに真福寺貝塚の「大森式」編年は椎塚貝塚の加曾利B式の範疇とは異なり、かつ同等の「土器型式」との認識が宣言され、加曾利B式の「細別」変遷は武蔵方面と常陸・下総方面とは大きく分岐する、という加曾利B式研究史上極めて本質的かつ重要な思考回路が表明される。

しかも真福寺貝塚で抽出された「大森式」は関東地方の編年表からは直ぐに姿を消す。昭和11年や昭和12年に作成された最新の編年表(山内清男(1936)「縄紋土器型式の年代的組織(假製)」『ミネルヴァ』第1巻第1号附表・(1937)「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』第1巻第1号)では、真福寺貝塚での加曾利B式に続く「大森式」の位置には、加曾利B式を重複して2段記載しており、加曾利B式の「古いもの新しいもの」という系統的な2「細別」表現となる。

こうして杉山寿栄男の「大森式菱形土器」等は常陸・下総方面では異質な系統の変容土器群として認識され、関東編年の筋金からは姿を消すが、E・S・モースから一世紀を経て再び加曾利B式における武蔵方面の地方系列として「大森式」の意義が議論される(鈴木正博(1980)「大森貝塚土器社会論」序説『大田区史(資料編)考古II 大森貝塚』:(1980)「婚姻動態から見た大森貝塚」『古代』第67号:(1981)「取手と先史文化」下巻等多数)のは必然の成り行きでもある。

さて、山内清男の加曾利B式「細別」研究の出発点は昭和12年1月の最新2「細別」である。この2「細別」に通底する年代区分原理はベトリーのSD法的手続きである「類似度順序形態学」(本連載第25回等参照)を髣髴とさせるが、2年後の『日本先史土器図譜』初版・ガリ版袋入では

既に3「細別」へと進展しており、先ずは出発点となる2「細別」区分原理について理解を得ておく。

昭和12年の編年表「縄紋土器型式の大別と細別」によれば、関東における後期の土器型式は「堀之内」「加曾利B」「加曾利B」「安行1、2」の順で縦の段として編年される。「類似度順序形態学」に従えば、「堀之内」に近似する「加曾利B」、及び「安行1」に近似する「加曾利B」の2「細別」が指定され、「堀之内」に近い深鉢の形態や口縁部の(小)突起等の廻戸貝塚及び中妻貝塚の層位的纏まりは前者の「加曾利B」(以下、「加曾利B式(古いもの)」)に比定される。

次に「安行1」に近い後者の「加曾利B」(以下、「加曾利B式(新しいもの)」)には如何なる土器群が指定されるであろうか。この頃には池上啓介により昭和6年に発掘され、昭和8年には層位別土器分類が要領よく分析・報告される広畑貝塚(池上啓介(1933)「広畑貝塚」『史前学雑誌』第5巻第5号)が目玉される。精製土器は「第一類土器」、「第三類土器」、「第四類土器」に分類され、夫々は今日の「加曾利B3式」主体、「曾谷式」主体、「安行1式」主体に比定される。層位は下層の「第三貝層」(「第一文化層」)、中層の「第二貝層」(「第二文化層」)、上層の「第一貝層」(「第三文化層」)に識別され、「第一文化層」のみが「第一類土器」(「加曾利B3式」主体)単独出土となる纏まりの良い層位で、上位層となる「第二文化層」と「第三文化層」に併存する「安行1式」等が「第一文化層」には検出されない出土状況も注目

に値する。畢竟、広畑貝塚の代表的な「第一類土器」が「加曾利B式(新しいもの)」に比定され、取り分け第50図が体部で分立する大波状口縁深鉢の全貌である。



▲第50図 広畑貝塚の代表的な「第一類土器」

\*巻頭連載は隔月です。次回は太田裕さんです。

## 目次

■加曾利B式土器 山内清男と加曾利B式2「細別」(第47回) 鈴木正博 …1  
■考古学の履歴書 ことのはじまり(第40回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイパレット・サイト(第221回) 吉田智哉 …3  
■考古学者の書棚「縄文海進—海と陸の変遷と人々の適応」 小宮雪晴 …4

## 考古学の履歴書

ことのはじまりー「..それでは 何だ」(第40回) 問壁 忠彦・問壁 葎子

## 8. 奈良三彩薬壺形土器の大と小(4)

前回最後に図示した、岡山県津山市の国分寺所蔵の陶棺は、古墳時代最末期の物で、詳しくは拙著『岡山の陶棺』『岡山の歴史と文化』(藤井駿先生喜寿記念会編)福武書店1983年]を参考にしたい。陶棺は基本的には近畿地方も岡山県も土師質亀甲形で始まるが、須恵質が加わる時期には、屋根型が、近畿地方は四注に岡山では切妻になるのが原則。次第に近畿では、屋根型は丸形を帯びた蒲鉾形に変化。岡山では土師質まで切妻型を採用するものも現れる。須恵質の場合は、まず切妻屋根なのである。これは当時の大和政権屯倉(児島とか白猪)における正倉の屋根型表現かと思われることから、屯倉運営などに関わった集団内で使用された棺であったと考えられる。

この岡山県の陶棺形態推移の中で、津山市の国分寺にある四注屋根型棺は極めて特異なもの、これはまるで、政庁建物か、貴族の家か、寺か?これに埋葬された人物の特別な身分を思う。岡山県では火葬骨蔵器にも小型の陶棺形品があり、それには亀甲も切妻も四注もそれぞれの屋根型があり、まるで被葬者の出自を思わすようでもある。

陶棺の話が長くなったが、実は美作の津山近く発見の三彩薬壺形壺は陶棺と共に出土は間違いない。両者の埋葬間には、1世紀近い差があったとしても、この時期、古い古墳を自分たちの祖先の墓として、再利用埋葬し、再度祭祀を行う傾向が見られた時期【拙著『8・9世紀の古墳再利用』(1982)『吉備古代史の基礎的研究』1992年 学生社再録)で三彩壺は陶棺に収納されていても不思議ではない。

この三彩壺の保存状態は、極めて良好とはいえるが、石櫃で完全に守られた状況とは言えない。特に蓋上面半分の釉薬剥げが激しく、その部分では宝珠つまみも半欠である。これは長期間の間に、上から時に僅かな水滴などあった状況を思わす。また底部保存は良好なことから、地面から離れ全体は保護される条件の所で埋納されていたと思う。須恵質の陶棺内で保存されていたとしても矛盾はない。

ところでかつては、現在の津山高校にあったはずの陶棺の方は、行方不明。国分寺の陶棺はどこから来たのか?国分寺では、既に住職は次代に譲られている田中孝照氏はお健在。様子をお聞きした。同氏は80歳、1942年生まれとのこと。小さい子供の時、父である当時の住職に、「おまえが生まれるより前から、上瓜生原の人が持ってきたもので、大切にしなければいけないものだ」と聞かされていたとのこと。津山地方では20世紀も初めの頃なら、中学校でも陶棺は持て余し物となり、かつての出土地に返された可能性は高い。出土地もいまさらと、近い寺に持ち込んだのではないか。これは全くの私の推測に過ぎないが。田中孝照氏も反対の理由はないと賛成された。上瓜生原は、寺から2kmばかりとのこと。

ところでまた全く違った話になるが、私共のように岡山県で育ち、太平洋戦争が終わるまでの、皇国史観を教え込まれた者にとっては、吉備真備は知らなくても、同時期の郷土の偉人、和氣清麻呂を知らなかったら、先生からは大目玉。また子供では、めったに目にすることもない、太平洋戦争が終わるまで使用された10円札に、刷られていた人物は、和氣清麻呂である。それは

奈良時代2度位についた女帝、孝謙・称徳天皇が熱愛し、天皇にと望んだ道鏡を退け、皇統を守った忠臣とされてのことであった。

この和氣清麻呂の出身地は、先に話した熊山遺跡の在る山塊東北に接する地域で、現在も和氣町の地名が使われている。この一帯は奈良時代以来、備前から美作の分離も含め、郡・郷域の変化の多い地域で、和氣清麻呂については、最も多く論じた平野邦雄氏(『和氣清麻呂』人物叢書 吉川弘文館 他)にも詳しいが、地元でも多く論じられたことである。また清麻呂が姉の広虫と、別途には語られないことも著名である。

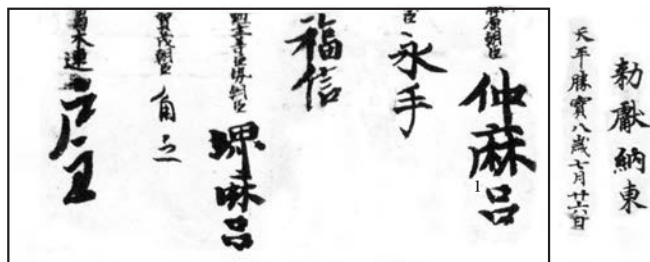
清麻呂の誕生は天平5(733)年で、誕生の地は、721年に備前の邑久と赤坂の両郡から5郷を割いて置かれた藤原郡が、726年に藤野郡と改められた所である。早速にややこしい地名である。姉の広虫は天平16(744)年に15才で葛木戸主(かつらぎ へぬし)と結婚。姉とは実質3歳違いらしい。

5年ばかり後の、749年聖武天皇が位を譲り、孝謙天皇の代になると、政権の実質的な力は、光明皇太后の紫微中台となり、藤原仲麻呂が長官地位にあって勢力を持っていた。この職場で、広虫の夫、戸主は、紫微少忠になっていた。

752年には東大寺の大仏開眼。756年には先帝聖武の崩御。この年には戸主に対し、都での孤児、男9・女1人の里親的立場が認められたとの記載も『続日本紀』にはある。

その後764年、藤原仲麻呂の乱後、姉の広虫は乱の連座で死罪となる375名の助命減刑を願って許され、孤児83人を引き取っている『続日本後紀』。これは既に夫の死後と思われるが、女帝の彼女に対する信頼の、いかに大きかったかを物語る。肝心の話がまた次回に残ってしまった。

【下は天平勝宝5(756)年7月26日正倉院献物帳の署名 著名人の後に「戸主」の署名も『大日本古文書』挿図より 他にも彼の署名数点あり】



## 問壁忠彦 略歴

1932~2017年 岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる  
1951年 岡山県立操山高等学校卒業  
1955年 岡山大学法文学部法学科卒業  
1954~1973年 (財)倉敷考古館学芸員  
1973~2006年 同上館長  
1968~1998年 広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講  
1982~2005年 就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講  
2006~2015年 (財)倉敷考古館学術顧問

## 問壁葎子 略歴

1932年 岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる  
1951年 岡山県立操山高等学校卒業  
1955年 岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業  
1955年 岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)  
1956~2015年 (財)倉敷考古館学芸員  
1979~1986年 中国短期大学非常勤講師(歴史学)  
1985~2004年 神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授  
1995年 明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回は山本暉久先生です。

## Jレーエッセイ

## マイ・フェイバレット・サイト 221

## 岩櫃城跡 ～群馬県吾妻郡東吾妻町大字原町ほか

吉田 智哉

城とは何か。このことについて考え始めたのはいつ頃だったのだろうか。過去の自分に問いかけても今ほど深く中世の城に関わり、考えを巡らすことになるとは思ってもみなかったと思う。ふと立ち止まった時、城とは何かを考えるきっかけを与えてくれたのはいくつかの城の調査に関わったことではなかったか。今回はその城の中でも現在進行形で事業を進めている巨大な山城、群馬県北西部に位置する岩櫃城跡について紹介したい。

岩櫃城跡は、群馬県吾妻郡東吾妻町に所在する戦国期（諸説あり）～近世初頭に機能していた中世の山城である。東吾妻町は中山間地域に属する県北西部に位置し、町中央部には長野県境を給源とする吾妻川が流れ、その中流域に属している。川の作り出した河岸段丘と周囲を榛名山や浅間隠山、薬師ヶ嶽などの山々に囲まれたまさに自然とともにその歴史を紡いできた町でもある。

吾妻川中流域の左岸側に標高802mを計る巨大な岩塊を携えた奇勝が目につく。岩櫃山である。弥生時代中期にはこの山の山頂付近の岩陰に弥生人は再葬墓を作った。山の背後に、もしくは山を越えた空にあの世・異界を覚えるほどの異様な景観を有する山の中腹に、山城が中世になると築かれた。それが岩櫃城跡と呼ばれる中世城館だ。城は山より東方へ四方に伸びる尾根上に占地し、山城の中心的な機能を有する要害地区、その外郭部の中心的な曲輪群となる志摩小屋地区などのほか、城下と考えられる城下町地区や番城・番匠と関わったとされる新井地区などで構成される。城の中心には本丸（主郭）・二ノ丸・中城を東へやや直線状に配置し、周囲は城代屋敷が置かれたとされる殿邸や出浦洲、家臣団屋敷と伝わる水曲輪や志摩小屋などがあり、さらに周囲には放射状を呈する複数の堅堀や堀同士を連結するような横堀が所狭しと築かれ、堀がまさに縦横無尽な状態となっている。

岩櫃城跡の築城段階は判然としない。近世期の記録では鎌倉・南北朝期とも伝承されるが当時の一次資料からは確認されない。城の認識が確実となるのは永禄7年（1564年）の北条氏康書状に「岩櫃」と初出されるのを待つことになる。また、この時期には城下町と評価される「平川戸」の記載も確認され、岩櫃城本体と併せて城下町も含めて一元的な整備が行われた可能性が見え隠れする。武田氏の西上野侵攻に併せて、その先方を担った真田氏の関与が深く、天正10年（1582年）の武田氏滅亡以降は本格的に真田氏が管理し、上野国へ織田方の滝川一益が進出してからは一時的にでも織田方の支配下となるが、わずか数年で真田氏は岩櫃城の支配を取り戻すことになる。その後江戸初期（慶長～元和年間）に至るまで真田氏の関与が続き、元和元年（1615年）に城代屋敷が城下となる原町へ移されたことを期として、廃城へ至ったと考えられている。

岩櫃城跡は昭和47年に町指定史跡となったが、国指定史跡登録へ向けた総合調査を平成25年度から実施した。発掘調査（平成25～27年度）・群馬県内中世遺跡遺物調査・石塔調査・文献史料調査を軸におよそ5年に渡った多様な調査を稼働したことで岩櫃城跡の一端を現出させることができた。特に発掘調査成果に触れると、城の北方外郭となる志摩小屋と城の中核で高所の本丸、そして城東部に位置する城下町地区の3地点を調査した。ただし断片的な範囲確認に留めているため、各遺構の年代観や変遷など課題として置かれた問題も数多い。

その中でも防御遺構として堅堀（葉研堀）や横堀、柵列などが検出され、特に志摩小屋で検出された横堀は人為的に埋め戻され、現在の曲輪へと改変されていることが判明し、城内の設計・機能変化が伺われる評価へと繋がった。加えて城下町地区の最東端に位置する堀切も人為的な埋設行為が認められたほか、周囲の堀肩を壊して埋土とした

いわゆる「破城」行為があった可能性も指摘されるに至った。曲輪内部の遺構としては、掘立柱建物跡や柱穴、土坑や溝に加えて石積み遺構・金属加工遺構などが見つかった。特に本丸での遺構確認が主で、その多くは遺構面上に多量の中世遺物を包含する盛土層があり、このことから盛土によって本丸内部が改変されていた様相が確認された。また、本丸検出の金属加工遺構は、小規模な掘立柱建物跡と炉跡で構成されており、小鍛冶の印象が強い。周辺からは鍛造剥片や熔けた銅銭・銅塊などのほか、埴塼も出土している。埴塼からは金など複数の金属粒子が確認されたことで、本丸には様々な金属を取り扱う人物とその場所として機能していた空間が存在していたことが判明した。本丸及び志摩小屋検出の石積み遺構では、岩櫃山原産と考えられる凝灰角礫岩を主体に長軸を意識して2段（志摩小屋）・3段（本丸）に40～80cm程度に垂直積みをしている。また、石と石を直接接触させず、間詰め土を用いて積み上げる技法である。盛土の土留めとしての機能を想定しているが、確認されたのは曲輪内のごく一部であり、本遺構が曲輪全面に巡っていたのかは今後の課題となっている。このほか、城下町地区の東側先端付近で検出された道路状遺構は、中世～近世に至って複数枚硬化面が検出され、長期間の継続利用が認められるほか、検出位置が現在の尾根上より南へ一段下がった狭い平坦面より検出されており、城への往来としての利用は現在利用されている道ではなく、尾根下に設定された平坦面を動線としていることが明らかとなった。これらの遺構からは岩櫃城跡の内部構造や城へと向かう動線などを含め城の内外を検討する大きな成果といえるが、当初に触れたとおりあくまで断片的な情報が垣間見えているのみであり、より詳細な全体構造や曲輪ごとの機能などを明らかにするために残された課題は大きいと考える。

出土遺物でいえば、年代観として15～17世紀初頭の製品が中心となる。主に本丸からかわらけ、内耳土器といった在土器製品のほか、瀬戸美濃窯碗や志野窯皿の国産陶器や龍泉窯系青磁碗、景德鎮窯系染付碗などの貿易陶磁が目立ち、他にも小札・鉄鎌・鉄砲玉・鉄釘・銅鉾・銅銭などの金属製品、基石・砥石・硯などの石製品など多岐に及ぶ。このうち、かわらけは群馬県内では箕輪城跡などごく一部の城館にしか類例がなく、長野県や山梨県の城館などにおいて類似例が見出されるなど県内視点からすると「特異」と思われる様相が伺える。また、内耳土器は全て信濃型であったという状況も加味すれば、元々吾妻郡の文化交流圏が信濃国側という需要に即した在土器の様相と捉えられるかもしれない。これら在土器の変遷や詳細な年代観設定も含めて在土器様相の検討は今後の大きな検討課題として捉えている（これらの遺物は、発掘された日本列島2019及び2021地方展示で多くの方にご覧頂くことができた）。



▲石積み遺構（本丸）



▲かわらけ集合（厚手・薄手）

総合調査を経て令和元年に国指定史跡となった岩櫃城跡を巡る動きは著しい。全ての人にとって史跡とは何か、城とは何だったのかを命題に、今後保存活用計画策定へと動くことになる。また、これまでの調査成果を基にした公開活用である【岩櫃城フォーラム】の継続開催とともに、令和3年度に東吾妻町で初となる岩櫃城を主役とした企画展【国指定史跡岩櫃城跡を見る！～岩櫃城跡調査の足跡～】を開催した。これからも岩櫃城跡を知ってもらうための試みは今後さらに加速するはずである。同時にこれからも永劫の保存を目指すための方針の模索や新たな岩櫃城跡の姿を調査より明らかとすることも大きな命題となっている。開かれた史跡を目指す中で新たな課題も多く、今後も紆余曲折の道のりを歩むことになると思われるが、史跡とともに着実な歩みを進めていきたい。願わくば本記事を目にした皆様の多くが岩櫃城跡へと足を運んでいただけることを心から願いたい。※次回のマイ・フェイバレット・サイトは内海遥さんです。



▲岩櫃城跡（東から、写真中央・岩櫃山→東へ延びる尾根に展開）

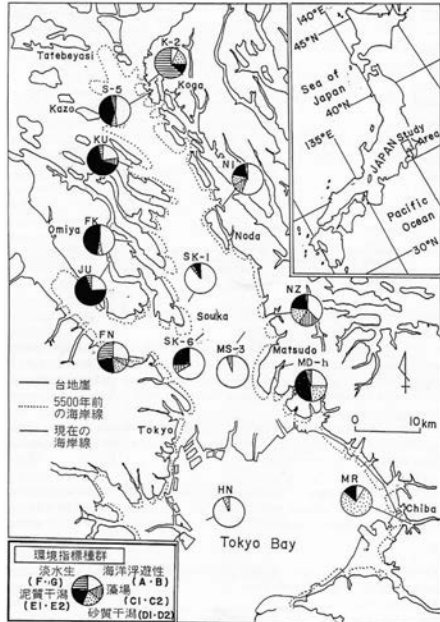
考古学者の書棚

「縄文海進 一海と陸の変遷と人々の適応」

遠藤邦彦・小宮雪晴・野内秀明・野口真利江 著／富山房インターナショナル(2022)

小宮 雪晴

縄文海進時の海岸線の検討は、貝塚の分布を中心に想定されてきた。貝塚は文化であり、縄文海進は自然現象である。文化的痕跡から自然環境を想像するという考え方に個人的には違和感があった。28年前「縄文時代以降の松戸の海と森の復元第2節珪藻化石の検討―国分谷の完新世珪藻化石群―

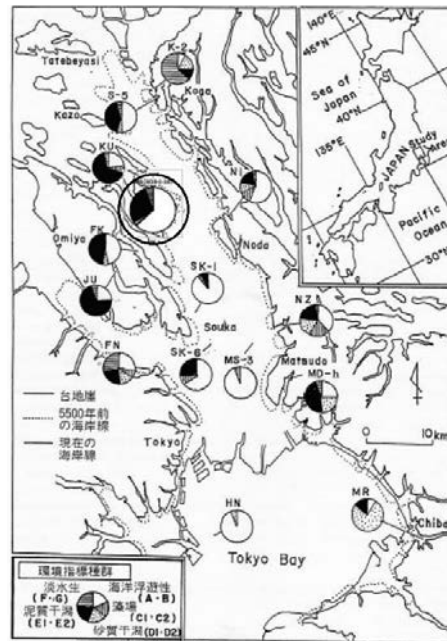


▲図1 奥東京湾の各地点における5,500年前の珪藻化石群衆の組成(1994小杉ほかより転載)

(1994 小杉正人ほか 松戸市立博物館)」が発表された。この中で珪藻の環境指標種群のうち外洋指標種群(A)と内湾指標種群(B)を合わせ「海洋浮遊性種群」、同様に海水砂質干潟種群(D1)と汽水砂質干潟種群(D2)を合わせて「砂質干潟種群」、海水泥質干潟種群(D1)と汽水泥質干潟種群(D2)を合わせて「泥質干潟種群」と括られた。そしてその地点での珪藻の組成を円グラフで表示することで、縄文海進が大局的に可視化されたのである(図1)。この図から、現東京湾から奥東京湾の中央ラインで海洋浮遊性種群の優占率が高いこと、HN~MS-3~SK-1のラインで海洋浮遊性種群が優占することがわかる。また、大宮台地側で泥質干潟種群の割合が高く、奥東京湾西岸域の支流では東岸の下総台地側と比較すると泥質干潟種群の割合が高い。奥東京湾の最奥では淡水性が多く、K-2では淡水性が優占している。

こう見てくると黒浜貝塚群付近、すなわち元荒川左岸のデータが気になるところである。国史跡黒浜貝塚(遺跡名:炭釜屋敷貝塚)では、史跡整備に先立ち、主観を極力排除するため、周辺低地を含めボーリング調査と理化学分析を行ってきた。図2は図1に史跡黒浜貝塚の西側低地のボーリングコア(H19-1)からの黒浜式期に該当する箇所(9)のデータを追加したものである(※小宮2021)。大宮台地の他の貝塚と比較しても海洋浮遊性種群が卓越していることが一目でわかる。

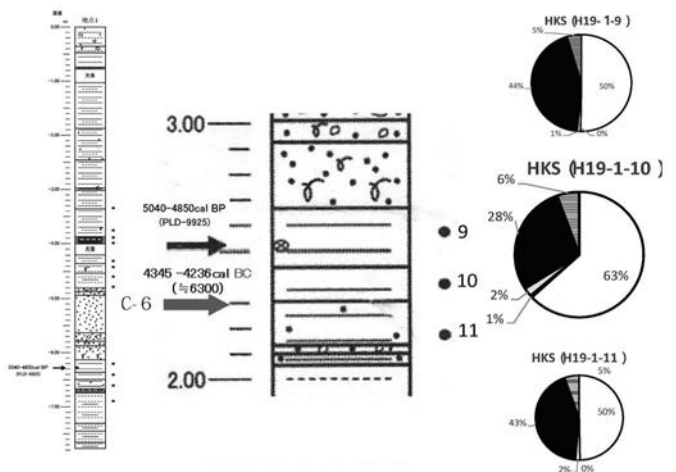
図3はH19-1地点のボーリングコアの海成層の範囲で珪藻分析の結果である。●10の上位と下位の較正年代値から、●10は黒浜式期に当たる。組成は海洋浮遊性種群が60%を超え、次いで泥質干潟種群28%である。●10よりも古い時期である●11では海洋浮遊性種群の割合は50%ほどであり、逆に泥質干潟種群の占める率が高い。また、●10より新しい時期の●9ではほぼ●11と同じ組成である。H19-1



▲図2 奥東京湾の各地点と黒浜貝塚群との比較(1994小杉ほかより転載)

地点のデータからは、当地域の海進の状況は、海洋浮遊性種群の増減と、泥質干潟種群の増減の関係に特徴づけられる。

H19-1地点のデータは縄文海進の終焉も物語る。5040-4850cal.BP期は、海洋浮遊性種群の減少期であり、泥質干潟種群の増加期である。また、粘土質の海成層の上に泥炭層が観察され、その上には小礫層が堆積する。さらにその上位には分厚い砂層が堆積している。これは元荒川の河川洪水の痕跡である。さてこの時、縄文人はどう適応したのか。



▲図3 H19-1地点データと珪藻組成(2021小宮)

今後、縄文海進と人々の適応については、海進終焉期のボーリングコアの検討が必要となる。その先によりやく数千年に及ぶ縄文海進期の奥東京湾周辺の人々の適応の様子が見えてくるのである。

※小宮雪晴(2021) JT-nagisa-特集号 蓮田市教育委員会

アルカ通信 No.228

発行日 2022年9月1日  
 企画 角張淳一(故人)  
 発行 考古学研究所(株)アルカ  
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL 0267-25-0299  
 aruka@aruka.co.jp URL: http://www.aruka.co.jp